

平成 18 年度海外研修派遣会員報告書

派遣員 関戸 雄一 中村記念南病院放射線部

はじめに

平成 18 年度海外研修派遣会員として、本学会より助成を受け、2006 年 8 月 27 日から 9 月 3 日まで米国・カリフォルニア州スタンフォード大学にて研修をさせていただいたので、その内容と印象について報告します。

期待していた事とその結果

講義の内容としてはモダリティごとに最先端の話をいただき非常に満足しています。特に高磁場 MRI や分子イメージングについては、研究ラボの見学もあり、かなり刺激的な内容でした。

しかし私自身、現在の研究テーマの中心は CT であったのですが、CT に関しては講義のみで他のモダリティのような研究ラボの見学がなく、他のモダリティほど多くの情報を得ることができたとは思えませんでした。

得られた成果とそれをどう生かすか

実際にスタンフォード大学での講義で学んだことや、現在行われている研究をすぐ我々の施設に持ち帰つて行なうことは不可能ですが、アメリカの放射線画像診断部門で学んだ業務システムの中で、良い点があれば我々の施設でも今後取り入れていきたいと考えています。

最も印象に残ったこと

アメリカの医療における放射線科の“貢献度”的大きさを大学の各画像診断施設の充実度で感じ取ることができました。装置についてはいまでもなく例えば、日本で言う“読影室”と呼ばれる所を案内していただいたのですが、薄暗い部屋に 100 インチ近い液晶モニタが何台も置いてあり、その数と大きさに圧倒されました。また、本研修での最終講義で当大学の放射線診断部門の Chairman である Gary Glazer 教授に “Future of Radiology” というテーマで講義をしていただいたのですが印象に残ったことは、“今後 50 年先も Radiology は発展し続ける”と断言していました。この言葉は今後私達が、放射線診断業務や研究活動を行っていく上で非常に励みになることがあります。

今後の海外研修に期待する事

日本においてはできないような事を経験できたので、是非これからも継続して開催していただけるよう希望します。プログラムも各モダリティ共、非常に刺激的な内容であったのですが、しいて言えば予め研修プログラムを公表してから募集を行うと“期待外れ”がなくなるのではと思います。

最後に

今まで国際学会などに参加した経験のない私にとっては、語学力がとても心配がありました。しかし、幸いにも研修の時には常時、2 名の通訳の方が付いてくださり私達の質問を英語に翻訳してくれましたので非常に心強く感じました。帰国後、振り返るともし通訳の方がいなければ今回のように講師との活発な意見交換ができなかつたのではと考えます。また、研修前までに、もう少し語学力を上げて英語で講師の先生方とディスカッションしたかったことを後悔しました。

今回の研修を通してこれまでの業務や研究活動に非常に有意義な経験をさせていただいたことは言うまでもありませんが、普段あまり交流をもつ機会の少ない専門以外のスペシャリストの方々と今回、交流をもつ機会ができたことは、自分にとって非常に貴重な財産となりました。

謝辞

最後に、今回の海外研修参加にあたり、研修会員として助成をいただきました藤田 透学会長、ならびに学術交流委員会、日本放射線技術学会関係者の皆様、さらに今回の研修のサポートをしていただきました GE 横河メディカルシステムスタッフの皆様に厚く御礼申し上げます。

また、海外研修への参加を快く承諾していただいた中村記念南病院 武田院長、放射線部 真田科長をはじめとする同僚の皆様に深く感謝申し上げます。



修了証授与式にて(左:筆者、右:セミナーの Course Director である Michael Moseley 教授)